

# 福祉系大学及び学生とのワークショップ報告

## 学内学会自主企画 福祉系大学及び 学生とのワークショップ報告書

代表執筆者 学部2年 田中智葵  
共同執筆者 学部2年 高橋直哉  
学部2年 樋沢幸大  
学部1年 富山信哉  
学部1年 本重紀樹

### 1. はじめに

私達、学内学会学生企画委員会は二つの企画を立案しうち一つが今回私達の企画、他大生とのディスカッションである。今回のディスカッションにおいては生活保護の不正受給についてと尊厳死の是非について、普段日本社会事業大学の学生の視点とは異なる他大生とのディスカッションを通して新たな価値観の認識と改めて日本社会事業大学の学生としての自己覚知をねらいとして今回の企画を行うに至った。

### 2. 企画の狙い

今回の企画には大きく分けて二つのねらいが存在した。一つは新たな価値観の創出、もう一つが日本社会事業大学の学生としての自己覚知、の2点であった。

今回は他大生を招いてのディスカッションということで私達が普段学んでいる範囲を超えて私達が将来必要不可欠であろう多職種連携という点からも広い視野と一つの問題にたいする新たなアプローチ視点の発見を一つのねらいとした。

もう一つのねらいとして日本社会事業大学の学生としての自己覚知とあるが、これは他大生とのディスカッションを通して自分自身の考えを主張する場として自分自身の考えと他大生の考えを通して日本社会事業大学の学生としてゆくゆくは専門職としての立ち位置、考え方など改めて自分自身を見つめ直す良い機会になるということもねら

いであった。

### 3. 企画を行うにあたって

今回の企画は他大生を招き、ディスカッションを通じて多様な価値観を知るということを目標に行った。

他大生を招致するにあたっては、本企画のメンバーでアポイントをとり、打ち合わせをするなどして当日の参加の確約を行った。

ディスカッションのテーマについては「尊厳死」「生活保護」の2つを用意した。

「尊厳死」は、この言葉自体を知らないという人も多くいるので、資料に「尊厳死とは何か」また、「実際にアメリカであった事例」について詳しく記載し、配布した上で、日本においてこの尊厳死を合法化すべきか、それとも禁止すべきなのかというテーマで話し合いを行ってもらった。

「生活保護」については参加者の知識も幅広く論点がずれる可能性もあったため、簡単に説明したうえで現在の生活保護のシステムを継続していくべきか、新たなシステムを構築していくべきなのかという部分に焦点を絞り話し合いを行ってもらった。

当日は他大生も含め4、5人のグループに分かれてもらい、各グループに模造紙と付箋紙を配布した。その後、ディスカッションのテーマについての資料を確認し、KJ法を用いたディスカッションを行ってもらい、各グループの話し合いで出た意見を模造紙にまとめ、代表者にそれを発表してもらい、最後に助言者の黒川京子先生に総括していただくという形で企画を運営した。

### 4. 集客の方法

集客として、まず本学部の2、3学年に向けて、「学会の魅力の周知を兼ねて」本企画の概要説明を行った。計15人に声掛けをしたが、学会のよ

うな機会やディスカッションに馴染みのない学生が多く、5人が検討、その中で参加した人はわずか1人であった。

検討した人たちのうち参加しなかった理由は「多忙」であったが、それ以外の10人は「自分の意見に自信がない」という理由が最も多かった。

そのため、参加者を募るため、なるべく「参加しやすさ」を強調し再度別の学部生8人程度に声をかけたところ、5人が検討、そのうち2人が参加となった。

この場合においても、「意見に自信がない」という理由での不参加という返答が最も多かった。

尚声掛けする学生に関しては、学業に熱心でコースに入っている、または希望している学生を中心に一対一口頭での声掛けやLINEにより声掛けを行った。

上記のように「学会」「ディスカッション」というものに不慣れで、敬遠してしまう学生が多かった。企画の性質のうちそれらを強く推した声掛けが逆効果になったといえる。また、今回の企画の集客は一部に向けての集客を主に行ったため、学生全体にあまり認知されていなかった。そのため、声掛けを行った学生以外の参加者があまり見られなかった。

学生が興味を持ったうえで「参加したい」と思える企画にしていき学生目線を意識した周知していく必要がある。

## 5. 当日の流れ

当日は勝部麗子氏の講演後から当日準備を開始し、他大生及び本学部生を招き入れるための教室準備等の準備に取り掛かった。その後全体でのリハーサルや、企画としての趣旨を再度確認するなどして企画の運営に携わる我々企画局員一同、万全の準備で本番を迎えられるよう備えた。当日の企画時における流れだが、リハーサルに則り行動し、本番はリハーサルで考えていた時間配分に比べ当日、本企画に参加した方々が盛り上げてくださった影響もあり、全体的に長引くという傾向にあった。

当日の流れとしてはあらかじめこのような形であり、本企画は成功に終わったのではないだろうか。と我々企画局員の中ではまとまった。

しかし、この「学内学会」を学生が運営に携わり、企画の運営も持つにあたり、初年度という挑戦的要素も多い中での企画であったため、改善点も浮き彫りとなった。

前提として今回の企画の趣旨としては「他大学生との交流」、「価値観の違いを見出し、それを共有する」というものが主であったが、今回の企画において、不手際が重なり他大学生を多く招致することができなかったということは企画局員全員が感じた反省点であった。

また、上記にて、全体でのリハーサルを行ったと記しているが、実際には本番前リハーサルのような最終確認的な意味合いにおけるリハーサルではなく、司会進行の台本を作るなど、準備不足が多くそれを補うという意味合いでのリハーサルになってしまったように思う。

当日の流れ、及び当日の反省を同時進行で記載したが、やはり学生による運営の初年度であったためにマニュアル等も作られておらず、どのように運営を円滑に進めるか、まさに五里霧中という環境の中での進行であったためどうしても不手際が多く発生してしまった。



## 6. 各グループの議論と傾向

### ●グループ 1

社大生 3 年 1 人、2 年 2 人 他大生 1 人

#### ・ 尊厳死

子どもなどに関し自己決定できる年齢の設定や、安楽死との明確な区別化、家族など第三者が止められる制度を加えるなど、条件をつけた上ならば制度化に賛成できるといった結論となった。

#### ・ 生活保護

金銭給付が良いとは考えるが、受給者が依存してしまう、自治体での格差があるなどの問題点や、インターネットや世論での生活保護に対するマイナスイメージを挙げ、「奨学金制度のようにする」「金銭以外のプラスαが必要」その中で、「マイナスイメージに対する自己浄化も必要」という意見となった。

#### ・ 傾向

全員が KJ 法の活用を本企画で初めて知ったメンバーであったが、テーマの中の課題ごとにそれぞれの得意分野からの視点を駆使し議論を上げていた。

### ●グループ 2

社大生 2 年 3 人、1 年 1 人 他大生 1 人

#### ・ 尊厳死

憲法 13 条の幸福追求権と、それに伴う自己決定権に基づき合法化すべきであるという意見が多かった。

その上で、残された家族へのグリーフケアなどのバックアップの重要性も指摘された。

そして一番の問題点として、延命措置に対する尊厳死と自殺との違いなど、基準を明確にした上で法制化しなければならないという結論となった。

#### ・ 生活保護

「現行の金銭給付であるべき」という意見の上で、働けるのに働かない人がいることや、受給費よりも低い賃金での労働がある現状などを踏まえ、不正受給を未然に防止する法制強化が必要ではないかという結論となった。

#### ・ 傾向

メンバーの意見は固まりやすかったものの、考え方を変えることで視点を増やし、問題点を追及していた。



### ●グループ 3

社大生 3 年 1 人、1 年 3 人 他大生 1 人

#### ・ 尊厳死

他グループとの大きな違いは、最初に意見が賛成と反対という形で分かれていたことである。

反対の意見としては、「治療法が見つかる可能性が 0 ではないこと」「制度化して尊厳死が行えるか行えないかの線引きを行った場合、尊厳死をしたい人ができなくなるのではないかなどがあった。

最終的に、「自己決定」が最も重要という結論となり、インフォームドコンセントやドナーカードのような法的拘束力のある意思表示の必要性を訴えた。

- ・生活保護  
イギリスの「働き口も紹介する」制度を例に、金銭給付である現行制度「だけ」ではよくないという意見や、税金の無駄遣いをなくし、より消費者に金が回るシステムにしていくことなどの意見が挙がった。

- ・傾向  
KJ法の活用が最も的確に行われており、議論の立て直しの工夫によって立て直しが効果的に行われていたグループであった。

### ●グループ4

社大生3年1人、1年2人 他大生2人

- ・尊厳死  
尊厳死を合法化するための国としての準備態勢が整っていないこと、自殺との違いの明確化が

現状では難しいこと、日本人が死についての概念を持っているかどうか、など様々な視点からの意見があった。結論は、国レベルでのより深い話し合いの上で制度化するべきだ、と至った。

- ・生活保護  
不正があるから制度を変える、というのは間違っているが、そもそも自立支援のための制度であるため、自立支援を助長できるような改善が必要という意見が多かった。

- ・傾向  
話し合いが最も濃密に進行しており、時間が足りないという声が多く挙がったグループであった。

## 7. アンケート、考察

### 1. ディスカッション内での交流を通じて、

自分と異なる価値観と向き合うことができましたか？（回答者11名）

1. 大いにできた	2. まあまあできた	3. あまりできなかった	4. できなかった
4人	7人	0人	0人

### 2. 今回の企画は満足できるものでしたか？（回答者11名）

1. 大いに満足	2. まあまあ満足	3. あまり満足ではない	4. 満足ではない
5人	4人	2人	0人

アンケートからは、価値観の違いが見えた、企画に満足しているなどの意見が多く、企画としては成功したと言える。自由記述の欄には、更に知識をつける必要があると感じた、色々な意見があった、勉強になったといった意見があった。改善を意識させる意見としては、時間がもっとほしいという意見があった為、こちらに関しては、次回の企画の計画を練る段階から、メンバー間で

共有し、改善へ近づけていきたいと考える。直接言われた意見としては、学会と言われて参加したので固く厳かな空気なのかと思いきや、話しやすく楽しくディスカッションできたといった意見も見られたので、話しやすく楽しい空気といった学生企画特有の強みを次回からも全面に押し出し、集客率の向上に役立てていきたいと考える。

## 8. まとめ

今回企画では、アンケートや直接頂いた感想から、価値観の違いが見えて楽しかったといった意見が多くあったことから、研究的側面から見ても、上手く運営、進行できたと考える。

しかし、使用した手法のKJ法が存分に活用できなかったことや、グループによっては意見が固まりすぎてしまい、ディスカッションに詰まってしまったというようなことが見られた為、次回は企画にあった進行方法を取ることに、グループ間でのサポート役の配置なども視野に入れ、運営側がスムーズになり、なおかつ参加者により楽しんでもらえるように工夫していきたいと強く感じた。

また、他大学交流を目的としただけあり、企画の参加者には社会福祉学部以外の学部の方からの参加もあり、普段自分たちが学んでる社会福祉学に重点を置いた視点以外の意見もディスカッションに見られ、そこから議論が白熱している印象もあった。このことから、社会福祉学部だけで社会福祉学の勉強をし、より専門知識を深めていくことも大切だが、社会福祉学を専門としないほかの学問の視点からの意見を受けることにより、私達の視野も広がり、より様々な価値観を得ることができるのではないかと考え、学生であるうちに、様々な分野の方々と積極的に交流する機会を得て、自ら視野を広げて行くことも重要であると感じた。